夏目漱石全集

立原正秋全集

第十五巻

立原正秋全集　第十五巻
昭和五十七年十月十二日初版発行
昭和五十七年十一月十五日再版発行

著　者　立原正秋
発行者　角川春樹
印刷所　新興印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話東京二六五―七一一一（大代表）
振替東京三―一九五二〇八　〒一〇二
Printed in Japan 0393-573415-0946(0)
落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集　第十五巻　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

夏の光……五
流れのさなかで……一七五
きぬた……二二三
解題　武田勝彦　五二七

夏の光

第一章

一

庭から右方に見おろせる山の斜面はいちめんの五月で、粉をふいたような嫩緑が流れている。斜面が豁く鋭いので緑が逆流して渦をまいているかたちだった。植村石和はその斜面に秋の紅葉と冬の山肌を視ていた。ところどころに白っぽい紅色が浮いているように見えるのは、遅咲きの山桜の叢りである。なかに豆桜のむらがりがあった。橋川俊輔は山桜と豆桜のちがいを教えてくれたが、植村には見わけがつかなかった。ここからの渓谷のせせらぎはきこえないが、斜面の麓には渓谷があった。むかい側の山も粉をふいていた。眺めようによっては荒削りで男性的な山だったが、よく眺めると新緑のひと区切りがつぶらだった。

ここ箱根の木賀はいつきても季節の色が濃かった。といっても植村がここを訪ねてくるのは年に一度である。去年は夏のさかりだった。一昨年は秋の紅葉を見た。その前は葉の落ちつくした冬の山肌を見ていた。俺は、それらの季節が移ろうのを今日まで待っていたのだろうか、と植村は山の斜面を見おろして思った。

「いまでも東京には月に二回は出られるのですか」

藤棚の横に腰かけ用の分厚い板がしつらえてあり、橋川俊輔がそこに腰をおろしたとき、植村は話しかけた。

「最近は月に一回でればいい方だな」

橋川は袂から莨をとりだしながら答えた。
「隠棲するおとしでもないでしょうに」
「どうかな。……これは私の偏見だが、歴史学者はだいたいが隠者ではないかと思う。人類の変遷、興亡を見てくると、現実の社会の一齣は、まことに一条の光芒にすぎない、と思えてくる。おや、あれは鳩だ。一羽だけというのは、群からはぐれたのかな。……方法的には、自然科学に対立するものが歴史科学だ、と言ったのは、たしかウィンデルバントだったと憶えているが、歴史は、自然科学のように反覆ができない。一回的な記述が歴史科学だ。一回的というのは、言いかえると個性的ということだ。こんな仕事は、所詮は隠者の仕事だよ。きみの分野は自然科学だが、そんな風には思えないかな」
「僕はそんな難しいことは考えたことがありません。駈けだしの医者にすぎませんから」
植村は橋川と間をおいて板に腰かけた。
「三時頃まで暖かいよ。それを過ぎると冷たい気流が這いあがってくる。ここは春と初夏が同時に訪れてくる。……だが、きみは、いまになって、何故そんなことを知りたいのかね」
「誰でも、自分の過去を正確に知りたいのは、情ではないでしょうか」
足もとの地面にやわらかい陽がさしていた。透明な降るような陽の光であった。植村は、その陽の光に、橋川が話しだすまでの間合を見ていた。いつか昔もこんな間合があった、と植村は歩いてきた道をふりかえってみたが、いつどこでだったか、さだかにはおもいだせなかった。疲れきって、どうにでもなれ、と自分を投げだした季節があったが、そこにもいくばくかの間合があった。いまの間合は、それとはまったく異なっていた。静穏のなかに差しせまった感情がともなっていた。目前の新緑の裏に冬の山肌を視たのは、そのせいかも知れなかった。
「あれは、夏の光だったよ」
橋川はしばらくして言った。
「……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「日本の敗戦が彼を亡きものにした、と言ってもよい。私にはかけがえのない体験だった。私は、日本の敗戦から十年間ほどは、あの夏の光に絶えず支配されてきたと言ってもよい。いや、いまも支配されているかも知れない。……箱根の春は麓からやってくるのだな。反対に、秋は上から麓におりて行く。麓と上とでは一か月の差がある。ここら辺は間もなく躑躅の盛りとなる。きみは、この近くの蓬莱園の躑躅を見物したことがあるかな」

「いえ。ありませんが」

「四十種もの躑躅が三万株ほどある。おりがあったら見物するのもおもしろいだろう。……夏が去る、という表現が、あの日以後、私には適切ではなくなったのだな。私には、夏は滅んで行く季節としか映らない。死者が生者を支配する、ということが実際にあり得たのだ。それほどあの体験は強烈だった。だが、きみに、どこから話すべきか。手紙をもらったとき、私はきみに返事を認めながら、事実をありのままに話すべきか、それとも、私の見た夏の光について話すべきか、と迷った。しかし、どういう方法をとろうと、事実はひとつしかない。さっき言った、反覆の出来ない歴史を、私はこの目で視つめてきた。ちょっと待てよ、私の話しかたはすこし大袈裟にきこえるかな」

「どうしてですか。そんなことはありません」

「ところで、きみは、いま目の前に拡がっている景色を眺め、季節を感じるかね。これはもちろん愚問だ。私がこの新緑を美しいと感じているように、きみにもこの風景は美しいはずだ。ところがだ、ここにひとつの目がある。この目は、事物を平均化して眺めることしか出来ない目といってもよい。この目にあうと、すべてが均されて高低がなくなってくる。きみは、こうした人間の目の存在を信じることが出来るかね。いや、答は要らない。旧制の静岡高等学校で彼とはじめて会ったとき、彼はすでにそんな人間になっていた。はっきり言って、私は、そのとき、いやなものを視てしまった、と思った。といって、それは生理的な嫌悪感ではなく、縛りつけられるような何かをそこに感じたのだな。これは私だけではなかった。彼は、あらゆる意味ですでに大人だったよ。二年ほど前に、旧制静岡高等学校戦没者遺稿集として〈地のさざめごと〉という本が、静高卒の有志の手で編まれて出版されたことがある。私はその本のなかに、幾人かの級友の名を見出した。戦争を聖戦と信じたもの、戦争を批判した者、そのほか、いろいろな

かたちの手紙や日記が収録されていた。このなかに、第十八回の理科一類を出て東京帝大の工学部に入学し、昭和十九年末から航空研究所に動員された住吉胡之吉という学生の日記が収録されていたが、あの戦いの末期に、あれだけ澄明な視線を持っていたのは、私にはひとつの驚きだった。十八回の卒業だから私の一年後輩にあたるが、昭和二十年五月、この学生は、東京目黒の自宅で戦災死しているんだな。二十四歳という若さだ。この学生は、戦争を自分の理性で批判している。……だが、宋純は、いまあげたうちのいずれにも属していなかった。戦争をれいの目で眺めていたのだな。ところが、彼は戦争中に、右翼とも左翼ともつきあいがあった。これが解らないことだった。たとえば、敗戦のとき、彼はいったいどこを視ていたのか、これも私にはいまだにわからない。あのとき、なぜ朝鮮に渡ろうとしたのか。彼は、日本人に向っては、俺は朝鮮人だ、と言っていた。そして朝鮮人に向っては、俺は日本人だ、と答えていた。その答には、自分が混血である事実を超えて何か本質に迫ろうとした響があったように思う。それなら、彼が求めていた、あるいは視ていた、もしかしたら確実に把握していたかもしれない本質とは何であったのか。混血は彼にしてみれば単なる現象にすぎなかった。とすれば、その背後に横たわっている恒常的存在を彼はつかんでいたことになる。ところが、彼は理想主義者ではなかった。このことは私にもわかっていた。と言って、彼が無常というものを信じていたかどうか、仮に信じていたとしても、禅でいう自力本願と無常観をなかだちにした現実主義者であったかというと、そんな面はまったくなかった。これは、異父弟の信二が理想主義者であったのと対照的だった……」

こちらの山の斜面の中腹から山鳥の一群が舞いあがり、むかいの山の斜面をななめに切って明神ヶ岳の方に飛び去った。

「橋川さんが、その信二という人にはじめて会ったのは、いつ頃ですか?」

「あれは、昭和十五年の春だった。三月の末か四月のはじめだったということを記憶している。そのちょっと前に、津田左右吉先生の〈神代史の研究〉が発禁処分にあっているから、この記憶に間違はない。いや、ちょっと待てよ、あのとき、麹町の吉野家の座敷から桜が見えたから、四月だったろう。そうだ、四月のはじめだった。……そのとき、

宋純と信二は、すでに、離れられない仲になっていた。あれは、はじめから光と影の関係だった。昭和二十年の夏、信二が私にむかって、僕は自分の光と影を見失った、と言ったことがあるから、宋純が光であったことはまちがいない」

築地塀の向うは濠に沿った通りで、春の午後の陽がやわらかに降っていた。

「三分咲きというところだな」

橋川は二階の廊下から濠端の桜並木を見おろして言った。

「花か……」

吉野宋純は茶を淹れながらつまらなさそうに答えた。

「汪兆銘が、南京に国民政府を樹立したね」

「汪兆銘か、ああ、あいつは傀儡政権だ。傀儡政権というのは末路がはっきり見えるから、まことに興味のない話さ。最近いちばん面白かったのは、あれは二月だったな、斎藤隆夫が衆議院で反軍演説をして除名されたのは。あれは少々おもしろかった。あの男は、たしか、二・二六事件の直後にも、粛軍演説で軍を批判していたはずだ」

このとき、廊下のつきあたりの階段から、一人の青年が上半身を見せた。

「兄さん、あがってもいいかな」

と青年は橋川を見て一礼すると、部屋の中に声をかけた。

「あがってもいいが、かわりにウイスキーを持ってこい」

「よし、引き受けた」

青年は爽やかに答えると階段をおりて行った。

「弟の信二だ。今年、早稲田の第一高等学院に入ったが、剣道ばかりやっている。弟といっても、親父はちがうが、いい奴でな、俺とはすこぶる気があっている」

と宋純は階段の方をちょっと見てから言った。
「親父がちがうというと、弟さんは、お母さんの連れ子か」
「いや、反対だ。俺のおふくろが、俺をつれてこの吉野家に再婚してきてうまれたのが、あいつというわけさ」
「なるほど。そういう異父兄弟か」
「俺の上に二人いるが、一人は、いま、京都帝大の理学部に行っている。かなりの秀才だ。もう一人は女で、これがいちばん上だ。これは、たいした美人でもないのに、ある然るべき家に嫁いでいる。この二人は、当主の吉野蓮三郎の先妻の子だから、俺とは血の繋がりがない。ところが、信二のやつは、その二人とも血の繋がりがあるし、俺とも血を分けあっているから、行きつくところは、死ぬことも生きることも出来ない場所に立たされている、というわけさ」
「すこし穏やかでない言葉だな。……うまくいっていないのか」
「なに、うまくいっているさ。すべてがうまくいっている。小さいときはよく喧嘩をした。そんなとき、信二のやつは、永世中立国のようにいつも中立を保っていてね。いま思いかえすと、あれは実にたわいのない諍いだったな」
「一人は京都に、一人は静岡に、そして一人は嫁に行き、残された弟さんが東京にいるとなると、喧嘩のしようがないではないか」
「そう思うかね。俺もそう思いたいよ。ところがそうではないんだ。橋川、きみは、朝鮮人を知っているか」
「朝鮮人？　静高にも何人か朝鮮人がいるじゃないか」
「たしかにいる。しかし、奴等はみんな純粋な朝鮮人だ。……俺のようなあいの子ではない。しかし、これは実に瑣末なことだ。あとでこの辺を散歩しよう」
このとき、信二がウイスキーを持ってあがってきたのである。

豁い斜面に緑が逆流して渦をまいているように見えたのが、いつのまにか貌が変っていた。陽ざしの移ろいのせいだった。

「そのとき、二人ともとしは二十歳になっていたわけですね」

「いや。満で十九だったよ。彼の祖父が伯爵の李宋圭で、同じ麹町に居を構えている、と知ったのは、その日の散歩の途中だった。彼は、その日、実に淡々と自分の過去を語ったが、私の見たところ、彼はうまれたときからすでに劇の中にいた。彼の家から濠端沿いに南にむかって歩くと、いまはホテルが建っている紀尾井町の高台に出る。当時あそこには伏見宮邸があった。伏見宮邸を右に見て坂道を左折すると、やがて右側に清水谷公園が見える。その日、私達は、公園の方にはぬけずに、紀尾井町の坂をのぼり、麹町四丁目にぬけた。あの坂道をのぼりきった右側に、いまは文藝春秋と赤坂プリンスホテルが並んでいるが、あのホテルは、当時、李王の屋敷だった。あの御殿に棲んでいる男は、さっききみが言っていた汪兆銘みたいな男さ、と彼は屋敷を見て言っていた。彼の祖父の李伯爵の屋敷は、英国大使館の裏手あたりにあったと記憶している。日韓合併は明治四十三年だから、彼の祖父が麹町に屋敷をこしらえたのは、明治の末か大正のはじめではなかったかと思う。それより前、伯爵の息子の李東範が東京帝大に留学していたから、はじめはそのために建てられた屋敷だったかも知れない。すでに明治十九年には、駐日初代公使が東京に着任していたほどだから、朝鮮人の日本留学生は、かなり以前から来ていたことだろう。私はその日、彼の現在を、日韓合併という事実から歴史的見地に立って理解しよう、と努めた……」

「馬鹿げた話だ」

と宋純は李伯爵の屋敷の前で立ちどまりながら答えた。

「理解することが何故馬鹿げている？」

「歴史主義というのはひとつの立場だ。しかし、きみの友情は信じねばなるまい。いま、この屋敷に棲んでいる老人に出来たことといえば、朝鮮を日本に売り渡した、という事実だけだ。彼はそれを最大の名誉だと信じて疑ってい

ない。きわめて幸福な男さ。したがって俺の軀のなかには、祖国を売った男の血が流れている。かつては俺もこの血を自分の名誉のひとつに勘定したことがあった。幸福な男になりきれると思ってね。きみね、こんなものを理解してなんになる。いけねえ、なかから人が出てきた。歩こう。この屋敷には、李石範という俺にとっては正真正銘の兄がいる。奴とはいままでのところ年に一度のわりで顔があっている。今年はすでに正月に会っているから、いまこの道端で面をあわせねばならない理由はないわけだ」

宋純は九段の方にむかって歩きだした。

男爵松澄清輝の娘貞子が、伯爵李宋圭の長子である李東範のもとに輿入れしたのは、大正七年の秋だった。貞子二十一歳の十一月だった。この婚姻には初めから晴れやかなものが欠けていた。これは、動かされている歴史の中の一齣にすぎなかったから、この婚姻は格別なものではなかった。日本の皇族や華族の娘を、朝鮮の王族や貴族に娶せる、という政策は、かなり以前から採られていた。動かされている歴史のなかで、これらの人達は、自ら動き、そして歩きだすことを知らない人達であった。

この婚姻に喜びが欠けていたにしろ、大正八年には長男の石範がうまれ、一年おいて十年には宋純がうまれたのであってみれば、自ら動くことを知らないこの傀儡貴族にもひとつの場が生じてきた。すなわち、代々伯爵家を継ぐべき孫が日本の女とのあいだに出生した事実により、当主の李宋圭は、これで日本における李家の地位は安泰だ、という思いに浸ることができたのである。日韓合併時に、日本から爵位をあたえられた貴族が十一人いた。侯爵が二人、伯爵が二人、子爵が五人、男爵が二人の計十一人であった。爵位が彼等の生活を保障していたとはいえ、しかし彼等は日本人ではなかった。彼等は、自分がどのように動かされているかを肌で感じて知っていた。明治二十八年の十月三日、日本国公使三浦梧楼の率いる日本人刺客団六十余人による韓国景福宮における殺戮を、彼等は自分の目で見てきたのであった。彼等は閔王后が刺殺される現場にいたのである。彼等の身の安全を将来とも保障するものがあるとすれば、それは日本人になりきること以外になかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com